

日本英文学会中部支部
第70回大会プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日 時：2018年10月27日(土)

会 場：愛知学院大学名城公園キャンパス

(〒462-0846 名古屋市北区名城3丁目1番1号)

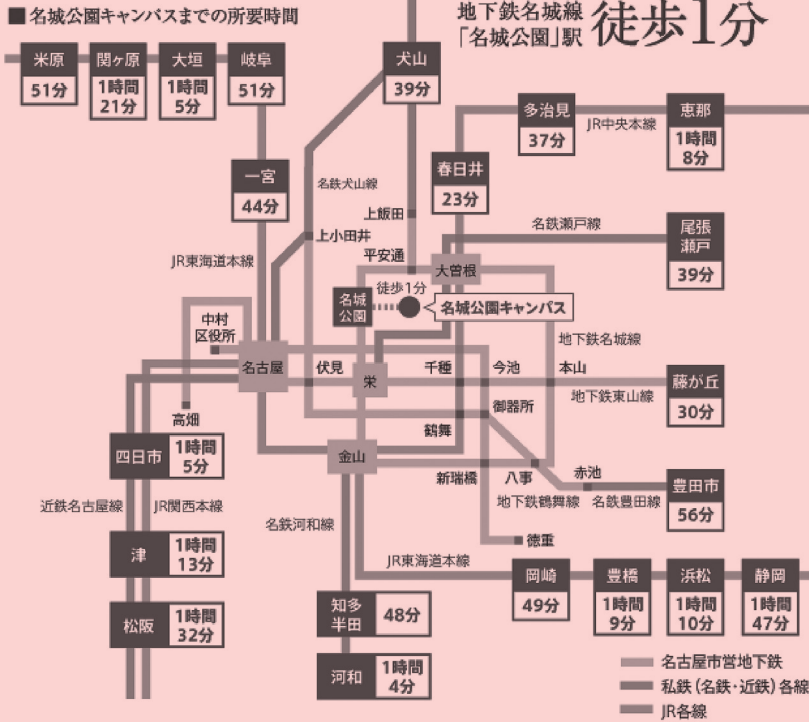
日本英文学会中部支部事務局

〒514-8507 津市栗真町屋町 1577
三重大学人文学部 小田敦子研究室内

E-mail: chubu@elsj.org

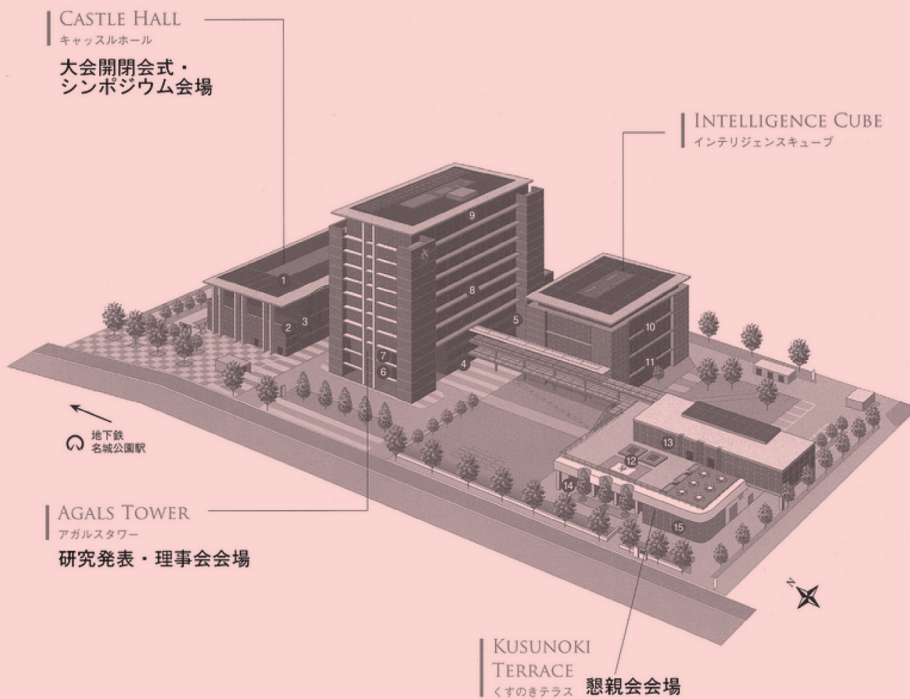
HP: <http://www.elsj.org/chubu/>

名城公園キャンパスへのアクセス方法

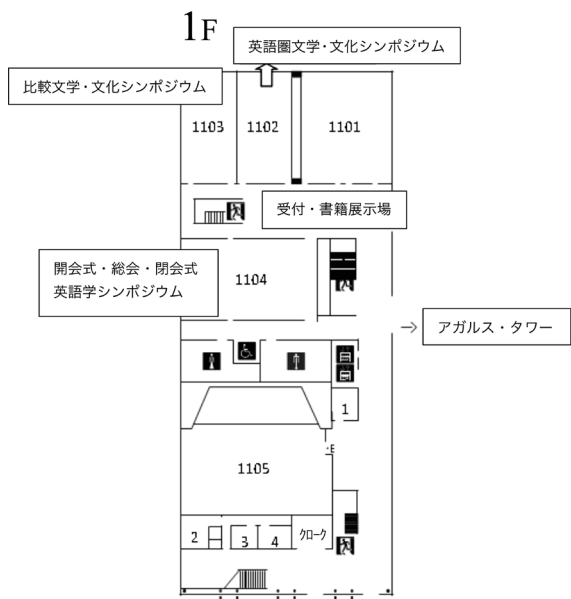


※乗り換え時間を含んでいますが、時間帯によっては変動する場合があります。
 ※上記の路線図は所要時間を表現するために簡略化しており、すべての路線を掲載したものではありません。

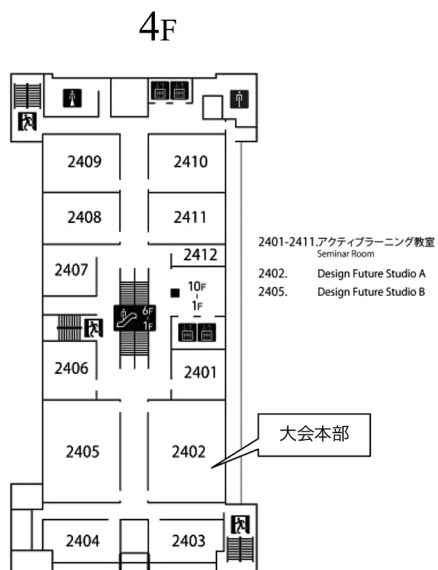
名城公園キャンパス マップ



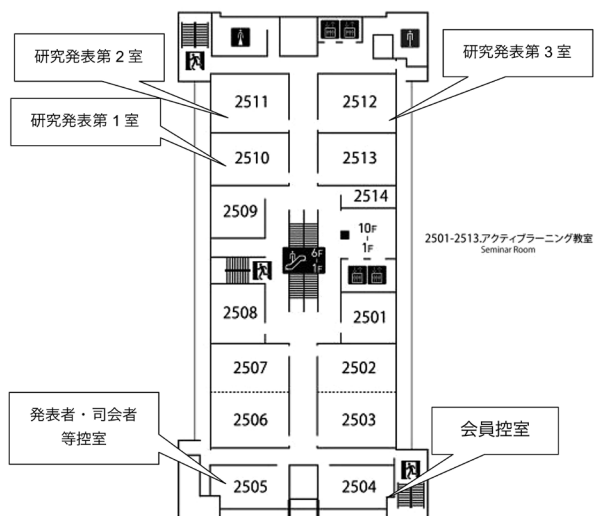
教室案内: キャッスル・ホール



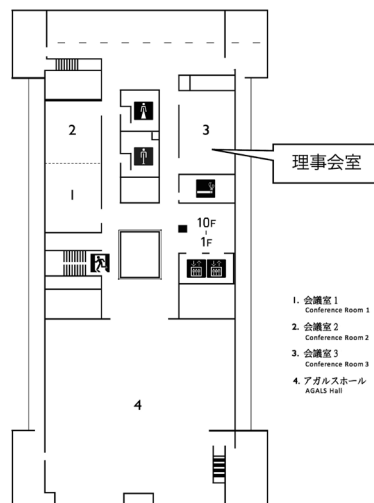
教室案内: アガルス・タワー



5F



10F



キャッスル・ホール

受付・書籍展示場: 1階入口 開会式・総会・閉会式: 1104 シンポジウム: 1102・1103・1104

アガルス・タワー

4階 大会本部: 2402

5階 研究発表: 2510・2511・2512 発表者・司会者等控室: 2505 会員控室: 2504

10階 理事会: 会議室3 (エレベーターをご利用ください)

開催校からのお知らせ

【ご入構について】

名城公園キャンパスには駐車場がございません、公共交通機関にてお越してください。

【食事場所について】

くすのきテラスの猿カフェ(懇親会場でもあります)をご利用ください。大津通を挟んだ向かい側にはイタリアン・レストランやカフェがございます。

【周辺のコンビニ情報など】

大津通を挟んだ向かい側と大学東側にローソンがございます。Googleマップでご確認ください。

【開催校からのお願い】

当日、法務研究支援センター学内事業がアガルス・タワーの大会本部と同じフロアの教室で、文学部歴史学科土曜セミナーがキャッスル・ホールの明倫ホールで、それぞれ予定されております。ご高配の程、お願い申し上げます。

また、当キャンパスには立看板等の設置に関する厳しい制限がございます。当日は大津通からキャッスル・ホールまで、案内の人員を立てる予定ですが、場合によってはキャッスル・ホール奥の会場受付まで直接お出まじいただくことになるかもしれません。ご了承いただきますようお願い申し上げます。

日本英文学会中部支部第70回大会プログラム

日 時：2018年10月27日(土)

場 所：愛知学院大学名城公園キャンパス（名古屋市北区名城3丁目1番1号）

大会受付 12:20より（キャッスル・ホール 1階 入口）

開会式 12:45～12:55（キャッスル・ホール 1階 1104）

開会の辞 日本英文学会中部支部長 宮地 信弘

開催校挨拶 愛知学院大学副学長 後藤 俊明

総会 12:55～13:20（キャッスル・ホール 1階 1104）

シンポジウム 13:30～15:40

第1室（英語圏文学・文化） キャッスル・ホール 1階 1102

『英語圏文学・文化における移民・外国人の表象』

司会・講師 松本 三枝子（愛知県立大学名誉教授）

講師 楚輪 松人（金城学院大学教授）

平出 昌嗣（千葉大学教授）

平沼 公子（名古屋短期大学准教授）

第2室（比較文学・文化） キャッスル・ホール 1階 1103

『語る・書くことの効用——臨床心理学の立場から・犯罪者・フクシマ』

司会・講師 加瀬 佳代子（金城学院大学教授）

講師 池田 豊應（元愛知学院大学教授 臨床心理士）

岩田 和男（愛知学院大学教授）

第3室（英語学） キャッスル・ホール 1階 1104

『通時的構文研究の射程——現状と課題』

司会・講師 前田 満（愛知学院大学教授）

講師 川端 朋広（愛知大学教授）

石崎 保明（南山大学准教授）

研究発表 第1発表 15:50～16:15 第2発表 16:20～16:45

第3発表 16:50～17:15

第1室（英文学） アガルス・タワー 5階 2510 15:50～17:15

第2室（英語学） アガルス・タワー 5階 2511 15:50～17:15

第3室（英語学） アガルス・タワー 5階 2512 15:50～16:45

閉会式 17:20～17:30（キャッスル・ホール 1階 1104）

閉会の辞 日本英文学会中部副支部長 鈴木 達也

懇親会 18:00～19:30 猿カフェ（会費4,000円）

研究発表一覧

第1室(英文学)

アガルス・タワー 5階 2510

司会 内藤 亮一(富山大学教授)

1. 『タイタス・アンドロニカス』における代替と繰り返し
谷ノ上 千奈美(名古屋大学大学院)
2. 『ロンドンの三淑女』における二人の高利貸し
——ロンドンの都市問題とカトリック・ユダヤへの
嫌悪
奥山 厚子(名古屋大学大学院)

司会 川津 雅江(名古屋経済大学名誉教授)

3. George MacDonald's Imaginative Writings
and their Impact on the Fantasy Works of J. R.
R. Tolkien and C. S. Lewis
秦野 康子(名古屋大学大学院)

第2室(英語学)

アガルス・タワー 5階 2511

司会 柳 朋宏(中部大学教授)

1. 英語における主語コントロール述語から繰り上げ
述語への歴史変化について
笠井 俊宏(名古屋大学大学院)
2. 多重SluicingとSwipingの義務的削除について
の一考察
平田 拓也(名古屋大学大学院)

司会 吉田 江依子(名古屋工業大学教授)

3. Tough構文に於ける空演算子移動とthat痕跡
効果
前澤 大樹(藤田衛生保健大学准教授)

第3室(英語学)

アガルス・タワー 5階 2512

司会 二村 慎一(愛知淑徳大学教授)

1. 英語の中間構文の特徴
——総合複合語の形成から考えて
柘植 美波(金城学院大学大学院)
2. 英語論文のアブストラクトに関する一考察
——日本語話者と英語話者の傾向の差異に
着目して
藤原 隆史(松本大学講師)

シンポジウム・要旨

第1室(英語圏文学・文化) キャッスル・ホール 1階 1102

英語圏文学・文化における移民・外国人の表象

司会・講師	愛知県立大学名誉教授	松本三枝子
講師	金城学院大学教授	楚輪松人
講師	千葉大学教授	平出昌嗣
講師	名古屋短期大学准教授	平沼公子

Benjamin Disraeliが同時代のイギリス社会について、「二つの国民が存在する。両者の間には交渉も共感もない」と、*Sybil: or, The Two Nations* (1845)において書いた時、彼は階級対立の問題について述べていた。しかし、19世紀の大英帝国においては、この言葉は、移民・外国人問題へと敷衍することができるのではないだろうか。

21世紀の現在では、globalizationを無批判に受け入れることはできないが、その流れを容易にとめることもできない状況である。しかしながら、アメリカにおいても、ヨーロッパにおいても、多文化共生主義は困難に直面し、それを否定する人々の声が大きくなっており、移民政策の見直しが行われている現実を無視することはできない。

つまり、globalizationによる貧富の格差の巨大化は、個人間にはとどまらず、国家間の問題となり、貧しい国から富める国への国境を越える膨大な人々の移動が世界中で問題となっている。一方で、そのような移民・外国人に対して様々な虐待や排除が顕在化し深刻な状況となっている。このような現状における、イギリスのEU離脱や、昨今のアメリカにおける移民政策の見直しは、孤立主義や保守主義への政治的流れであるが、我々はこの問題を歴史に学ぶという観点から、大英帝国時代のイギリス作家であるGeorge EliotやCharles Dickens、国境を越えた作家とも考えられるJoseph Conrad、さらに、アメリカにおける自発的な移民と、そうでない異人種マイノリティの問題に目を向けることになるRalph Ellison等を議論しながら、英語圏文学・文化における移民・外国人の表象を考えてみたい。

Daniel Deronda と Benjamin Disraeli

松本三枝子

George Eliotが『ダニエル・デロンダ』(1876)を書いた時代のイギリスは、Matthew Arnoldの*Culture and Anarchy* (1869)に代表されるように、大英帝国の屋台骨である中産階級に対する批判が激しくなった時代である。中産階級の功利主義、世俗主義へのアーノルドによる批判は、エリオットの最後の小説である『ダニエル・デロンダ』にも通底しているテーマである。

エリオットの中産階級批判は、その対抗軸として歴史的に排除され差別されてきたユダヤ人や、ユダヤ主義を描くことにより、より明確なものとなっている。時のユダヤ人宰相であるディズレイリが内閣を組閣し、国会がヴィクトリア女王にインド女帝の称号を与えた時期にこの小説は出版されている。

タイトルヒーローであるデロンダが、シオニズム運動に参加すべく東方へと旅立つ結末は、イ

ギリスの政治・社会状況やバルフォア宣言を先取りしたものとも読める。このように同時代のイギリス社会に深く根差した『ダニエル・デロンダ』を、イギリス社会とユダヤ人表象の観点から読み解きたい。

ブリタニアよ、何処へ行く?—ディケンズにおける外国人嫌いの表象

楚 輪 松 人

2016年、英国は「ブレグジット」—欧州連合(EU)からの脱退を決定した。英国国民による移民の流入制限である。かつて英国は海外からの避難民にとっての新天地であった。カトリック系のアイルランド人、ドイツ人、そしてロシアからは皇帝の迫害を逃れてユダヤ人強制集住地域からはユダヤ人が大挙してやってきた。今回の決定はこれまでの慣行に逆行するまさかの出来事であり、ある邦人金融機関のロンドン支店長は感慨した。「英国よ、何処へ?」と。

『リトル・ドリット』(1855-57)は、ディケンズの「イギリスの現状小説」の一つで、英国の象徴とされる女神ブリタニアの行方を描いた小説である。数あるディケンズの小説の中で注目し得る形で外国人が紹介されている唯一の小説である。最後の小説『互いの友』(1864-65)では、英国以外の他国を一種の「過失」と見なす英国人の尊大な心的傾向、「ポドスナッパー」が揶揄される。発表では、ディケンズの表象する英国人の外国人嫌い、そこに表現された移民排斥の心性(サイキ)を読み解いていく。

Joseph Conradとその時代

平 出 昌 嗣

西欧は、日本と違い、古代から移民、民族移動、侵略などの歴史に富んでいた。20世紀初めも拡大する帝国主義・物質文明の下に社会が激しく揺らぎ、人間と文明の意味が鋭く問われた。

コンラッドは移民・外国人の宿命を描くことで、故郷喪失者としての現代人の宿命を描こうとする。二つのタイプがあり、一つは“Amy Foster”のYankoのように、社会に溶け込めず、孤独のまま滅びるタイプ、もう一つは*Heart of Darkness*のKurtzのように、孤独な侵略者・征服者となるタイプで、*Nostramo*ではこの両者の宿命が描かれる。民衆の代表ノストローモ、支配者Gouldの宿命的孤独は、その土地に根を持たない外国人としての孤独であると共に、また文明の発達の中で大地から遊離してしまった現代人の孤独でもある。

この時代、コンラッドに限らず、異邦人・異文化という視点が、現代人と現代文明の意味を明らかにするのに有効だった。Henry JamesとE. M. Forsterは二つの異なる文化の接触を描き、またJames Joyceは*Ulysses*でユダヤ人を、D. H. Lawrenceは*The Rainbow*でポーランド人の系譜を物語の中心に置いた。

「見える」移民と「見えない」人種—ラルフ・エリスンの『見えない人間』と移民の表象

平 沼 公 子

トランプ政権の合衆国住宅都市開発長官ベン・カーソンは、大西洋奴隷貿易にて合衆国に連行されたアフリカ人たちを「奴隷船の底に乗ってやってきた移民」と呼び、自由意志による移民と並列したことで物議を醸した。このエピソードは、「移民の国アメリカ」における自発的な移民と、その他人種マイノリティの間の根本的相違を浮き彫りにする。この相違は、それが白人対黒人という明らかな権力構造ではないからこそ、議論することが困難であり、見過ごされがちな問題で

あろう。

ラルフ・エリスンの『見えない人間』(1952)は、合衆国における人種関係を扱ると同時に、物語の背景である1930年代当時の合衆国に既に存在した「奴隷を先祖としない黒人」である西インド諸島からの移民も描くことで、合衆国における移民とマイノリティの問題をも提示している。アフリカ系アメリカ人作家であるエリスンが描く移民の表象を通し、人種とエスニシティの不明瞭な境界線を作家がいかに探り、そこに紐づけられた認識の諸問題に取り組んだのかを読み解きたい。

第2室(比較文学・文化) キャッスル・ホール 1階 1103

語る・書くことの効用——臨床心理学の立場から・犯罪者・フクシマ

司会・講師	金城学院大学教授	加瀬 佳代子
講師	元愛知学院大学教授 臨床心理士	池田 豊 應
講師	愛知学院大学教授	岩田 和 男

世界を冷ややかに見つめながら、宇野常寛は「いまのこの国に本当の意味で語るに値する現実の一つも存在しない」と叫び、東浩紀は「ぼくたちはどうやら、想像力と現実、虚構と現実、文学と社会が切り離された時代に生きています」と嘆く。しかし、そんな絶望感とは裏腹に、「世界には虚構だけが捉えることのできる現実が存在する」ことを宇野は信じ、「文学を読むことが、社会を語ることの必要不可欠な要素のひとつである日がふたたび来ること」を東は願う(宇野『母性のディストピア』2017、東『セカイからもっと近くに—現実から切り離された文学の諸問題』2013)。人文学の想像力／創造力を知ってしまった彼らに、その力を見限ることはできない。

実際、人間は語ることをやめない。患者はカウンセラーに自らのトラウマを語り、東日本大震災の被災者は、その体験を伝えようと、未来に向けて言葉を紡ぐ。その語りや、彼らの苦しみを癒すというのなら、口から出たその言葉は、いかに彼らに再帰するのだろうか？ 今でもそこに、社会的意義を見出すことができるのだろうか？ さらにいえば、その語る行為は、被害者／被災者にのみ許されるものなのだろうか？ 頼まれもしないのに語り始める犯罪者たちの語りに、同じことがいえるのだろうか？

これらの問いをもって、本シンポジウムでは物語行為としての書くこと、話すことの意義を再考する。まずは、その効果を臨床心理の観点から見直した上で、犯罪者の語りを比較文学の立場から考察する。その上で、フクシマ体験の聞き書きの効用を、文学者の観点から浮き彫りにする。

語ること・書くこと・聞いてもらうこと

池田 豊 應

心理療法において話すことと聞くことが基本要件であることは大前提である。かつて私はカウンセリングについて「傾聴—理解—受容—共感という基本的態度を取り続けるカウンセラーとの関係において、悩み・被投状況の表現・言語化—感情の表出—事態の明確化—真の問題の露呈—直面化—対決—乗り越え—成長という過程が生ずることだ」と図式化したことがある。癒しとか治療の定義にもよるが、この図式のはじめの段階、すなわち「カウンセラーの傾聴や受容とクラ

イベントの悩みや被投状況の表現や言語化」の対応だけでもすでに「治療」的事態が成立しているともいえる。

しかし、生の体験や感情は本来、言葉とは位相を異にしているので、言語化という作業には多かれ少なかれ無理を伴う。さらに言語化とは同時に「意味づけ」「意味の発見」でもあるから、主体のさまざまな条件、そのときどきのあり方を反映する。話すこと、聴いてもらうこと自体に「カタルシス効果」があることは確かであるから、これも言語化には影響する。「語る」の意味には「だます」も含まれている。それゆえに心理療法としては、カウンセラーの受容的な共同作業が不可欠となるのである。「書くこと」とは、このような言語化の積み重ねをひとりで客観化する作業であるということができよう。

「絶望」を語る犯罪者を語る——加害者性と被害者性をめぐって

加瀬 佳代子

2015年、元・少年Aの『絶歌』が出版されると、その是非をめぐり、議論が噴出した。しかし、彼以前にも永山則夫、佐川一政など、著書を出版した殺人犯は存在し、永山に至っては新日本文学賞を受賞している。

本発表では、彼らの語りから、加害者性と被害者性の撞着という殺人犯が背負う「絶望」を炙り出し、その「絶望」の果てに、自らの語りを確立した永山を中心に考察を進める。永山には『無知の涙』に代表される扇動的な作品と、『木橋』のような叙情的小説があるが、これら二つの語りが等しく認められたわけではない。その違いは、彼の加害者性と被害者性の受けとめられ方の違いといえる。つまり、被害者・永山の語りが称賛されたが、加害者・永山の語りは手厳しく批判されたというわけだ。しかし、それは殺人犯・永山の両翼であり、被害者性ととも、加害者性をも引き受けたからこそ、永山は『木橋』を著すことができたと考えられる。そこで、永山から元・少年Aまで、彼らに対する批判を見直せば、被害者性を嘉し、加害者性を叩くという人間の加害者性が通奏低音として流れていることが見えてくる。

絶望を語る・聞き書きするとは？

岩田 和男

本報告は、福島県第一原発事故の被害に遭われた方々のうち、筆者が伊達郡川俣町山木屋地区で聞き書きした内容に基づいて、フクシマという表記のしかたに象徴的に現われる「絶望」と「希望」の本質を比較文学の立場から読み解こうとする試みである。具体的には、エリオットの『荒地』が暗示する世界・未来観を参照枠に用いつつ、2013年時点でインタビューした人々の語りの内容と2018年夏に予定しているインタビュー内容を比較したうえで、5年という歳月の文学的意味を可能な限り明らかにすることを主眼とする。その際、Margaretta Jolly, *Encyclopedia of Life Writing: Autobiographical and Biographical Forms* (Routledge, 2001) による「語る・聞き語りする」ことの意義を、池田豊應氏の言及する「だます」機能に照らして考察する。ヒロシマ・ナガサキ・ミナマタが里程標となるはずだが、石牟礼道子『苦界浄土』(1969)が刻印した「絶望」の複雑な意味はぜひとも吟味されねばならないと考えている。

通時的構文研究の射程——現状と課題

司会・講師	愛知学院大学教授	前田 満
講師	愛知大学教授	川端 朋広
講師	南山大学准教授	石崎 保明

近年、とくに海外では、構文文法(Construction Grammar)の理論に基づく構文の通時的研究が隆盛となりつつある。その結果、かつての英語史研究ではほとんど日の目を見ることがなかった特徴ある構文の通時的分析が続々と世に出ている。これらの研究は、コーパスなどの歴史資料を用いて記述・説明する点は従来のフィロロジカルな研究と同じだが、それに構文文法の理論を加味した点が画期的となっている。構文文法の理論を用いる利点は、構文の発達を意味論・統語論・形態論・語用論といった様々な角度から多元的に分析できる点である。また、この多元的アプローチにより、従来の理論では見えてこなかった分析の可能性が開けてきている。この通時的構文研究の中心軸となるのが「構文化」と呼ばれる現象である。構文化とは、自由な語の組み合わせ、あるいは既存の構文をベースとして、新たな構文——意味と形式の対——が誕生するプロセスである。本シンポジウムでは、上記構文文法のアプローチの有効性を示すため、これまで扱われてこなかった新たな現象を通時的構文研究の射程内に収めることを企てる。具体的には、構文要素の脱落現象や談話標識の発達、所格交替に関係する構文の発達に関わる事例研究をつうじて通時的構文研究の可能性を追求したい。

脱落現象と構文化

前田 満

前置詞の脱落(e.g. I'd better go (in) the other way)をはじめ脱落現象(dropping)は19C以来、意味変化との関係でたびたびとり上げられてきたが、現在のところその本質について十分な分析はなされていない。これはひとつには、先行研究では通常の省略(ellipsis)と脱落が明確に区別されていなかったためだと思われる。すなわち、省略は談話の場面における言語活動だが、脱落はそれ自体が言語変化だと考えるべきである。また、先行研究に構文化という観点が欠けていたことも脱落現象の理解が困難となった要因だと考えられる。本発表では、発表者が提案する構文化のメカニズムを用いて脱落現象を説明するモデルの構築を模索する。具体的には、脱落現象は構文化に特有の意味変化の結果生ずる構文化の付随現象だと主張する。また、今後の研究課題として、このモデルが半動名詞の発達プロセスの説明においても効力を発揮する可能性を示唆して発表をしめくくる。

構文化の観点から見る談話標識の発達

川端 朋広

談話標識とは、形式上は、文の主要部からは切り離されており、意味的にも、主節の命題内容に対して、談話構成的(textual)、あるいは対人関係的(interpersonal)なものを加えるという特徴を持っている要素の総称である。種類も幅広く、単一の語句で成立するものもあれば(i.e. ~, indeed.)、何らかの要素を補部としてとるもの(i.e. Only~)、あるいは、節の形式で機能するも

のなど (i.e. ~, if you please.)、さまざまである。文法化研究の代表的なテーマの一つとして談話標識の発達をあげることができるが、その「文法化」という現象に対する考え方も、初期の、単一の語句を対象とするものから、「構造/構文」の中での発達という考え方へとシフトしてきている。本発表では、いくつかの談話標識の発達過程を概観するとともに、Laurel Brinton や Elizabeth Traugott、Joan Bybee といった研究者たちの提唱する「構文」に対する考え方を比較・参照し、上記のような談話標識の発達を構文化の例として解釈する可能性について考察したい。

所格交替における構文の歴史的発達

石 崎 保 明

所格交替は、長い間、様々な理論的枠組みで議論されているが、この現象に関わる構文の歴史的発達が議論されることはこれまでなかった。本発表では、所格交替を許す典型的な動詞 load と spray を含む2つの構文、すなわち、場所 (location) を表す名詞句を目的語に置く構文 (e.g. load the truck with hay, spray the wall with paint) と物財 (locatum) を表す名詞句を目的語に置く構文 (e.g. load hay onto the truck, spray paint onto the wall.) の歴史的発達を調査し、関連構文の近代英語期以降の構文(変)化を議論する。具体的には、動作主を主語とした定形動詞として用いるこれら2つの構文は、いずれも発達の初期段階では一般的でなく、「ある物財がある場所に置かれている・噴霧されている状態」を描写する用例が多かったこと、および、spray に先行して発達した load では特にその傾向が顕著であったこと、などを指摘する。本発表では、さらに、セッティング主語構文など、所格交替との関連性が指摘されている構文との位置づけについても考えてみたい。

研究発表・要旨

第1室(英文学) アガルス・タワー 5階 2510 司会 富山大学教授 内藤 亮 一

第1発表

『タイタス・アンドロニカス』における代替と繰り返し

名古屋大学大学院 谷ノ上 千奈美

William Shakespeareの*Titus Andronicus* (1593-1594)は複雑な構造の復讐劇である。本来復讐劇は直線的にプロットが展開されるが、この劇ではさまざまな形で「代替」が繰り返され、本来の復讐が遠のく。タモーラにとっての復讐対象はタイタスとその息子たちであったはずが、ラヴィニアへとずらされ置き換えられた。タイタスの場合も復讐の対象はタモーラから彼女の息子たちへと揺れ動く。代替が繰り返された結果、復讐は分化され、遅延する。また復讐だけでなく、登場人物の役割においても代替は見られる。例えばラヴィニアは舌を失ったことで発話手段を失ったが、筆記行為がその伝達の役割を担った。サターナイナスは皇帝ではあるが、実質的に王権を握るのはタモーラである。人物の社会的役割や身体的作用もまた、置換・代替される。本論では「代替」と「繰り返し」がこの復讐劇においていかなる意味を担うのかについて考察していく。

第2発表

『ロンドンの三淑女』における二人の高利貸し
— ロンドンの都市問題とカトリック・ユダヤへの嫌悪

名古屋大学大学院 奥山 厚子

ロバート・ウィルソンの『ロンドンの三淑女』(*The Three Ladies of London*, 1581)には性格が甚だしく異なる二人の高利貸し、ユダヤ人ジュロントスと寓意の「高利貸し(Usury)」が登場する。これまでユダヤ人高利貸しジュロントスの特異性よりも、彼に対抗するイタリア商人マーカドラスの他者性について論じられることが多かった。作者はジュロントスというユダヤ人高利貸しに仮託して自らのキリスト教的理想を述べているのである。一方、寓意の「高利貸し」は、「金銭(Lucre)」が他の二人の淑女「愛(Love)」と「良心(Conscience)」を墮落させるために手を貸すばかりか、借金を返せなかった者を死に追いやるなど、冷酷非道そのものであり、「金銭」の秘書として三淑女の墮落の過程と深く関わっていく。「高利貸し」とその他の人物たちの会話からはロンドンが抱えてきた問題も浮かび上がってくる。その問題と二人の高利貸しを中心として劇中に見えるカトリックやユダヤへの嫌悪との関係を明らかにしたい。

第3発表

George MacDonald's Imaginative Writings and their Impact on the Fantasy Works of J. R. R. Tolkien and C. S. Lewis

名古屋大学大学院 秦 野 康 子

George MacDonald (1824–1905) is a Scottish preacher and writer, whose imaginative works shaped the fantasy novel as a modern literary genre and influenced such writers as J. R. R. Tolkien (1892–1973) and C. S. Lewis (1898–1963). He is best known for his fantasy books, *The Princess and the Goblin* (1872) and *The Princess and Curdie* (1883). Inspired by these works that are set in the imaginary kingdom, Tolkien wrote *The Hobbit* (1937), in which he partly borrowed the image of “classic goblin” MacDonald had depicted (*Tolkien On Fairy-Stories* 250). Tolkien wrote *The Lord of the Rings* (1954–55) as well. In his essay “On Fairy-Stories” (1947), Tolkien praised MacDonald for “achieving stories of power and beauty” as in his fairy-tale “The Golden Key” (1867) (26–27). Lewis wrote *The Chronicles of Narnia* (1950–56). He also compiled the book *George MacDonald* (1955), stating in the preface that MacDonald does best in fantasy that hovers between the allegorical and the mythopoeic (xxix).

This presentation explores the potent images and motifs found in MacDonald's *The Princess and the Goblin* and other works in order to identify the elements of fairy-tales and fantasy-as-art that had an impact on the fiction of Tolkien and Lewis.

 第2室(英語学) アガルス・タワー 5階 2511 司会 中部大学教授 柳 朋 宏

第1発表

英語における主語コントロール述語から繰り上げ述語への歴史変化について

名古屋大学大学院 笠 井 俊 宏

本発表では、先行研究及び歴史コーパスを用いることで、英語における主語コントロール述語が意味変化に伴い、繰り上げ述語の構造へと変化することを示す。Traugott (1997) では、今日典型的な主語コントロール述語として分析されている promise が、主観化により繰り上げ述語としても用いられるようになった通時的変化を観察しているため、本発表では、今日繰り上げ述語の用法を持つ形容詞にも同様の変化が見られるのかを歴史コーパスを用いて調査を行い、その変化と分析の説明を試みる。

その際、主語コントロール述語と繰り上げ述語の間には密接な関係があるということになるが、それは Hornstein (1999) 等で提唱されているコントロールの観点から捉えられるため、通時的研究を行うことで両構文を統一的に扱えられる更なる証拠になると主張する。

第2発表

多重 Sluicing と Swiping の義務的削除についての一考察

名古屋大学大学院 平田 拓也

一般的に動詞句削除などの省略構文において、削除操作は随意的に適用されると言われている。しかし、多重 Sluicing と Swiping と呼ばれる構文では削除操作は義務的に適用されるということが観察されてきた。本発表では、この義務的な削除は線形化の矛盾を解消するために適用されると主張する。この主張を実装するために Fox and Pesetsky (2003) の循環的線形化の仕組みを採用する。これらの構文の派生では、削除の remnant となる wh 句と動詞などの TP 内にある要素との間で矛盾した線形化の情報が確立されるものの、TP を削除することに伴い TP 内にある要素に関係する線形化の情報は最終的な線形化の情報から取り除かれるために、線形化の矛盾が解消されると主張する。一方、TP の削除がない場合には、この矛盾が解消されないため非文になると主張する。

司会 名古屋工業大学教授 吉田 江依子

第3発表

Tough 構文に於ける空演算子移動と that 痕跡効果

藤田保健衛生大学准教授 前澤 大樹

本発表の主な目的は、空演算子の生起環境よる tough 構文の容認性の変異に原理的な説明を与え、更には that 痕跡効果との統一的な分析を探求することである。文献中のデータを整理すると、tough 構文の容認性には、(i) 主語・目的語の別、(ii) 空所を含む節の時制、(iii) that の出没、という3つの要因が関与していることが明らかとなるが、本発表ではこれらを格の問題へと帰する接近法をとる。より具体的には、格素性を時制素性と同一視する Pesetsky and Torrego (2001, 2002, 2004) の見解の下で、格=時制素性が複数の下位素性からなる set であり、それらの set に於いて下位素性の個別的 Match は set 単位での Match より非経済的だと提案することで、(i) は空演算子の時制 set が v-V が持ち C-T が持たない素性を含むことにより、そして (ii) は T と主語の、(iii) は母型動詞と時制演算子の、時制素性に於ける Agree への空演算子の介在可能性によって説明されると主張する。(iii) はほぼそのまま that 痕跡効果の典型例へと拡張可能であり、上述の2つの現象の統一的分析が得られる。

第3室(英語学) アガルス・タワー 5階 2512 司会 愛知淑徳大学教授 二村 慎一

第1発表

英語の中間構文の特徴——総合複合語の形成から考えて

金城学院大学大学院 柘植 美波

The book sells well のような中間構文 (middle constructions) は、英語の主要構文とされている。*best-selling*、*best-seller*、*easy-reading* などはその構文から派生された総合複合語 (synthetic compounds) であると考えられる。本発表の目的は、同表現から派生された総合複合語がどのよ

うに形成されるのかということを考え、その複合語に関する分析を基に中間構文において重要な特徴とは何かということをはっきりとすることである。Lieber (1983)による総合複合語についての研究を概観すると、Adv V-ing形の複合語は不適格であると分析され、Keyser and Roeper (1984)やFagan (1988)による分析でも中間構文から派生される総合複合語は不適格であると述べられている。ところが、大規模コーパスBritish National Corpus (BNC)で中間構文から成る総合複合語の例を収集すると、Adv V-ing形の複合語は数多く見られる。加えて、Lieber (1983)による総合複合語に関する原理が、中間構文から派生される複合語に適用することを示す。これらの分析より、中間構文がindividual-level predicatesであり、通常副詞と共起し、event suppressionが作用するというを示唆する。

第2発表

英語論文のアブストラクトに関する一考察

——日本語話者と英語話者の傾向の差異に着目して

松本大学講師 藤原隆史

英語論文におけるアブストラクトは、日本語論文と同様に限られた文字数で書かれるが、そこに詰め込まれた情報量は多く、論文の要旨を把握し質を見極めるといって非常に重要であると考えられる。しかしながら、アブストラクトを専門的に扱った研究はそれほど多くはない。特に、日本人が書いた英語論文のアブストラクトに関する研究は相当少ないものと思われる。本発表では、国際語用論学会に提出されたアブストラクトのうち、日本語話者と英語話者のアブストラクトを比較し、アブストラクトの構成にどのような違いがあるのかを明らかにしようとするものである。日本語の「起承転結」がどのような影響を及ぼしているのか、また、英語話者と日本語話者ではアブストラクトの開始部分と終了部分でどのような差異があるのかを中心に考察する。この考察を通して、英語らしいアブストラクトでは研究の「背景」と「結論」部分が必須の構成要素であることを論ずる。

大会関係役員一覧

支部長	宮 地 信 弘 (三重大学)
副支部長	鈴 木 達 也 (南山大学)
支部選出評議員	滝 川 睦 (名古屋大学)
支部代表理事	山 本 卓 (金沢大学)
事務局長	小 田 敦 子 (三重大学)
事務局長補佐	野 田 明 (三重大学)
書記	西 村 秀 夫 (三重大学)
監事	中 川 直 志 (中京大学)

大会準備委員 (◎委員長 ○副委員長)

英文学

内 藤 亮 一 (富山大学)
川 津 雅 江 (名古屋経済大学)
丸 山 修 (静岡大学)

米文学

◎杉 野 健太郎 (信州大学)
柳 沢 秀 郎 (名城大学)
竹 腰 佳誉子 (富山大学)

英語学

○二 村 慎 一 (愛知淑徳大学)
柳 朋 宏 (中部大学)
石 川 一 久 (愛知学院大学)
吉 田 江依子 (名古屋工業大学)

開催校大会準備委員

岩 田 和 男
石 川 一 久

